

9月2日 教師の仕事

30年以上教師を続けていて思うのは、教師の仕事は「農業」に似ているということだ。せっせと知恵の種をまいて、肥やしをまいて、芽吹けばしめたもの、芽吹かなくても落ち込まない。また、種と肥やしをまく。そんなことを繰り返しているうちに生徒の中に、きれいな花を咲かせるものが出る。大木に育て上げるものが出る。中には卒業して何年も経ってから種を芽吹かせるものが出る。教育とはそんなものだと思う。これだけしてやったのに、なぜ芽吹かないのだ、なぜ実らないのだと不満を抱いてはいけない。教師は全能の神ではない。まいた種を必ず芽吹かせ、すべて育て上げるなんてできっこない。いろんな教師がいろんな種をまき続けることで、いろんな生徒の中に芽吹きが生じる。

2年ほど前、ある卒業生から、「先生、飯行かへん？」と誘いを受けた。約束の場所に行くと、もう一人卒業生が待っていた。彼の高校時代の元カノである。二人の近況を「フムフム」と聞いていると、二人が口をそろえてこう言った。「先生、何の根拠もなく私たちに〇〇大学を受けろと言ったでしょう。でも、先生が薦めてくれた大学に行って、私たち本当に良かったと思ってる。大学でいろんなことにチャレンジしたことが、今の仕事に繋がってる……」

もちろん、何の根拠もなく言ったわけではない。二人ともリーダー性がある、その大学なら成長できると思ったから。実際、30そこそこで一人は小さいながら東京で起業し、一人は大手通信会社の課長になっていた。

「先生、俺先生より年取絶対多いから、ここは払っとくわ」。高校時代の人なつつこさそのままに“課長”が言った。私がまいたどの種が彼の中で芽吹き、生長したのかわからない。でも、“私がまいた”ということだけは確かなことだ。

「お言葉に甘えて……」といきたいところだったが、息子ほど年の離れた彼に払わせるわけにはいかない。薄い財布を覗きながら、「金のなる木の種でもあればなあ」と独り言つ私であった。

